# スピノザの「延長の属性における直接無限様態」について

四竈正夫

スピノザは、「神から直接的に産出されるものの例、および無限な様態を媒介として産出されるものの例を知りたいと思います。」と言うチルンハウスに答えて、「第一種のものは、思惟においては絶対に無限なる知性、延長においては運動および静止です。また第二種のものは、無限の仕方で変化しながらも常に同一に止まる全宇宙の姿です（これについては第二部、定理一四の前にある補助定理七の備考を御覧下さい）。」と『書簡六四』で述べている。

これは、スピノザ自ら、直接間接両無限様態について言及する唯一の箇所とされている。すなわち、「第一種のもの」は直接無限様態を示し、「第二種のもの」は間接無限様態を示す。ここに「第二種のもの」とされる「無限の仕方で変化しながらも常に同一に止まる全宇宙の姿」が、延長の属性における間接無限様態のみを示すものなのか、あるいは、思惟、延長両属性における間接無限様態を示すものなのかについては諸説があるものの、思惟の属性における直接無限様態が「絶対に無限なる知性」、延長の属性における直接無限様態が「運動および静止」であることは問題のないところとされている。

しかしながら、我々が小論で取り上げ検討を加えようとするのは、延長の属性における直接無限様態とされ

ている「運動および静止」の持つ問題である。

## 一

本節では、無限様態とは何かということについて述べられる。

無限様態とは、M・ゲルーによれば、無限な原因と有限な結果との間の媒介者である。[1]

スピノザは、直接無限様態について、『エチカ』、第一部、定理二一で次のように述べている。「神のある属性の絶対的本性から生じるすべてのものは常にかつ無限に存在しなければならない、言いかえれば、それはこの属性によって永遠かつ無限である。」。

また間接無限様態について、定理二二で次のように述べている。「神のある属性が、神のその属性によって必然的にかつ無限に存在するようなそうした一種の様態的変状に様態化した限り、この属性から生起するすべてのものは同様に必然的にかつ無限に存在しなければならない。」。

神のある属性の絶対的本性から生じるということは、神のある属性から直接的に生じるということである。[2]ゲルーはこれを、『短論文』における「なんら他の事情を介在させずに zonder eenige omstandigheeden」[3]という表現に鑑み、神のある属性から「いかなる条件にも左右されずに inconditionnellement」生じるということであるという。[4]ゲルーによれば、神は神の本性だけから、すなわち、神の絶対的本性から、一挙にいかなる条件にも左右されずに、無限に多くの有限な様態からなる一系列の全体を生じる、そしてこの統一体が無限様態である。[5]無限様態は、属性によって永遠性ないし必然性、および無限性を与えられる。[6]

この無限に多くの有限な様態の統一体は、様態の永遠な本質について言われると共に、様態の持続存在についても言われる。前者は直接無限様態であり、後者は間接無限様態である。(7)

## 二

本節では、スピノザによって延長の属性における直接無限様態と示された「運動および静止」が自然学的役割を果たしていることについて述べられる。

既に述べたように、スピノザは、延長の属性における直接無限様態として「運動および静止」、そして、間接無限様態として「無限の仕方で変化しながらも常に同一に止まる全宇宙の姿」を示している。これら延長の属性における直接間接両無限様態が本格的に取りあげられるのは、『エチカ』、第二部、定理一三備考の後の補助定理群（一つの定義、五つの公理、七つの補助定理、一つの系、一つの備考からなる）においてである。そしてここは、周知のとおり、スピノザの自然学が述べられる部分である。

スピノザの自然学は、最単純物体について述べる部分と複合物体について述べる部分とに二分し得る。最初の公理一、二、補助定理一、二、三、系、そしてそれに続く公理一、二が最単純物体についてであり、後は複合物体についてである。

「運動および静止」は、まず最単純物体を相互に区別するものとして述べられる。最単純物体は単に「運動および静止」のみによって相区に区別されるのである。これをスピノザは補助定理一において次のようにいう。「物体は運動および静止、迅速および遅緩に関して相互に区別され、実体に関しては区別されない。」。この最単純物体は、ゲルーによれば、「絶えず振動している微粒子」である。そしてその振動の仕方が各々に固有な

ため、微粒子は相互に区別されることになるのであるという。(8)

次に複合物体においては、その構成諸部分の間の「運動および静止」の割合が一定に保たれることによって、その形相あるいは本性が保たれるとされる。

そしてスピノザは、多様に動かされながらもその本性を保ち得る複合物体の輪を広げていき、ついに全自然に到る。「もし我々がこのようにして無限に先へ進むなら、我々は、全自然が一つの個体であってその部分すなわちすべての物体が全体としての個体には何の変化もきたすことなしに無限に多くの仕方で変化することを容易に理解するであろう。(補助定理七備考)」。言うまでもなく、これが『書簡六四』で示された延長の属性における間接無限様態すなわち「無限の仕方で変化しながらも常に同一に止まる全宇宙の姿」に他ならない。

以上から明らかなように、延長の属性における直接無限様態である「運動および静止」も、間接無限様態である「無限の仕方で変化しながらも常に同一に止まる全宇宙の姿」もともに、スピノザの自然学において一定の役割を果たす。それらは、あくまで「物体 corpus」に関して一定の役割を果たす。そしてスピノザにおいて、「物体」とは「神が延長した物と見られる限りにおいて神の本質をある一定の仕方で表現する様態(『エチカ』、第二部、定義一)」であり、それは持続存在としての様態でしかない。というのは、『エチカ』、第二部、公理五に、「もろもろの物体およびもろもろの思惟の様態のほかには、いかなる個物も〈あるいは所産的自然に属するいかなる物も〉我々は感覚ないし知覚しない。」とあるように、「物体」とは「感覚」の対象だからである。

要するに、スピノザによって延長の属性における無限様態とされるものは、直接無限様態であれ、間接無限

様態であれ、ともに、スピノザの自然学において一定の役割を果たすものと考えられるのである。

## 三

本節では、直接無限様態の本来の役割を「運動および静止」が果たしているか否かということについて考察される。

さて実情は以上のとおりであるにしても、スピノザにおいては、間接無限様態はともかく、直接無限様態は、そもそも自然学的役割ではなくて、形而上学的役割を果たすべきものではなかったのか。直接無限様態は、既に挙げた『エチカ』、第一部、定理二一、「神のある属性の絶対的本性から生じるすべてのものは常にかつ無限に存在しなければならない。言いかえれば、それはこの属性によって永遠かつ無限である。」に明白なように、属性によって永遠かつ無限とされるものであって、あくまで形而上学的役割を果たすべきものであるはずである。

しかるにスピノザにおいて、延長の属性における直接無限様態とされる「運動および静止」は、既に見たように、持続存在としての様態に係わり、自然学的役割を果たすのである。我々は、このように明白に自然学的役割を果たす「運動および静止」が、本来は形而上学的役割を果たすであろうはずの直接無限様態とみなされていることに奇異の念を抱かざるを得ないのである。

## 四

本節では、チルンハウスの問いに答えるスピノザの言を通して、「運動および静止」が形而上学的役割を果たすことを要請されていないということが確認される。

ここで参考になるのは、熱心なデカルト学徒であったチルンハウス[9]とスピノザとの間に交わされた書簡である。チルンハウスのスピノザ宛書簡は現代の『エチカ』批判の最良のものに匹敵するというF・ポロックの意見[10]はともかくとして、チルンハウスの問いに答えるスピノザの言は、我々の当面の問題になんらかの示唆を与えるであろう。以下、若干長くなるが、両者の陳述を直接引用しつつ問題点を探っていこう。

『書簡五九』でチルンハウスは問う。「延長はそれ自体で見られる限り不可分で不変化的であるのにどうして我々は延長から実に多くの種々異なった事物の存在を、従ってまた各物においてそれぞれ異なるその構成諸部分の一定形状の存在を、アプリオリに導き出すことが出来るのかについてお教え頂きたく存じます。」。

これに対する返書は、『書簡六〇』であるが、スピノザはチルンハウスの問いに答えていない。

チルンハウスは、単なる「延長」から「多くの種々異なった事物の存在」を「アプリオリに導き出すこと」の困難を見ている。チルンハウスはこの問題の解決をデカルト学徒らしい仕方で行おうとする。『書簡五九』の引用部分に先立ってチルンハウスが、「なお私は貴下の御時間と機会の許します折りに、なにとぞ運動の真の定義とその説明をお願いしたく……」と述べていることがそれを暗示する。要するにチルンハウスは、単なる「延長」だけからは「多くの種々異なった事物の存在」を「アプリオリに導き出すこと」は不可能であって、それを可能にするためには、「延長」の他に「運動」が必要であると考え、そこでスピノザに「運動の真の定

義とその説明」を求めているのであると考えられるのである。

これに対してもスピノザは、『書簡六〇』で、「運動については、まだ順序立てて書いていませんから、別な機会にゆずります。」としか答えていない。

次のチルンハウスのスピノザへの問いは、『書簡六三』にあるが、ここで彼は論点を転じて次のように述べる。「神から直接的に産出されるものの例、および無限な様態を媒介として産出されるものの例を知りたいと思います。私の考えでは、第一種のものには思惟と延長が属し、第二種のものには思惟における知性と延長における運動とが属するのではないかと思います。」。

ここでチルンハウスは、「思惟」と「延長」の理解において誤ってはいるが[11]、「思惟における知性と延長における運動」を「思惟」および「延長」に続く位置に置いている点で、つまり、無限様態と見なしている点でその鋭さを示す。

実際、その返書である『書簡六四』においてスピノザは、「貴下の求められる例について申せば、第一種のものは、思惟においては絶対に無限なる知性、延長においては運動および静止です。また第二種のものは、無限の仕方で変化しながらも常に同一に止まる全宇宙の姿です。」と答えている。

以上の往復書簡から我々は次のことを知ることが出来るであろう。チルンハウスはデカルト学徒として、単なる「延長」から「多くの種々異なった事物の存在」を「アプリオリに導き出すこと」の不可能であることを見、同時にこの問題が「延長」に「運動」を結合させることによって解決されると考えた。ただその際、「運動」がデカルトにおけるように外から「延長」に注入されるのでなく、それをスピノザ形而上学における無限様態の位置に予見したことはチルンハウスのスピノザ理解の深さを示すものと言えよう。そして実際スピノザ

が、延長の属性における無限様態の第一種のものとして、つまり、直接無限様態として、「運動および静止」を挙げるにおよび、先のチルンハウスの提出した問題は、チルンハウスの考えるような形で解決されるかに見えたのである。

しかし実情は全く異なることがやがて明らかになるのである。

『書簡八〇』でチルンハウスは再度最初の問いを繰り返す。「私のきわめて理解し難く思いますのは、運動や形状を有する諸物体の存在がどのようにしてアプリオリに証明されるかということです。絶対的に考えられた限りの延長の中には何らそうしたものが見出されないからです。」。

スピノザの返書は『書簡八一』だが、そこにスピノザ自身の思想への言及は無い。「デカルトが解したような延長から、すなわち静止する物質としての延長から諸物体の存在を証明することは、貴下が言われる通り困難なだけでなく、全然不可能でもあります。」。

そこでチルンハウスは『書簡八二』であくまでスピノザに迫り答を要求する。「私はどのようにして延長の概念から事物の多様性がアプリオリに証明され得るかについて貴下御自身のお考えを知らせて頂きたく思います。デカルトの見解によれば、事物の多様性は、それが神からひき起こされた運動によって延長の中に生じた結果であるということを仮定することによってのみ延長から導出され得るのです。ところで貴下御自身も諸物体の存在がどのようにして必然的に神の本質からアプリオリに生起せねばならないかをこれまで証明しておられません。デカルトはこの証明を人間の把握力を超越するものと信じました。しかし貴下がこれと異なった考えを持っておいでのことを私はよく知っていますので、この問題について貴下にお尋ねする次第です。」。

この問題に対するスピノザの最終的な答が『書簡八三』で示される。「単なる延長の概念だけから事物の多

様性がアプリオリに証明され得るかどうかとのお尋ねですが、私はすでにそれが不可能であること、従ってデカルトが物質を単なる延長として定義しているのは正しくないこと、それは必然的に、永遠無限の本質を表現する一属性によって説明されなければならないことを十分明瞭に示したと信じます。」。

この前半で述べていることは、デカルト的延長からは事物の多様性がアプリオリに証明され得ないという『書簡八一』の繰り返しに過ぎない。チルンハウスの当初よりの問いに対する答は後半部にある。要するに、「物質は必然的に、永遠無限の本質を表現する一属性によって説明されなければならない」というのがスピノザの考えである。ここに、「永遠無限の本質を表現する一属性」とは「神の永遠無限の本質を表現する一属性」であり、これはスピノザが解するところの「延長 Extensio」に他ならない。

要するにスピノザは、デカルトが解するところの「延長」からは、それだけでは事物の多様性を演繹することは出来ないが、自らが解するところの「延長」からはそれが可能であるというのである。[12] ゲルーも言うように、スピノザは、物体の多様性の原理として「延長」の属性そのものをあてているのである。

スピノザが解する「延長」概念が持つこの特殊性は、彼が解する「神」概念が持つ特殊性に由来する。スピノザによれば、「神とは、絶対に無限なる実有、言いかえれば、おのおのが永遠無限の本質を表現する無限に多くの属性から成っている実体（『エチカ』、第一部、定義六）」である。そして「神」は「全自然の根源と源泉（『知性改善論』）」ともいわれる実在である。それは、H・H・ジョアキムの言うように、無性格で空虚な存在ではなくて、自らの中にあらゆる特質を含む存在充実である。[13] それは自己原因として無限に自己展開していく能産的自然である。それは活動しないと考えるのが、存在しないと考えるのと同様に不可能であるような「神」である。[14] そして、「延長」がその中の一つであるところの「属性」は「神」の永遠無限の本質を表

現する実在であり、言わばそれは「神」そのものであるとも言うことができるものである。

今やデカルトが解するところの「延長」との相違は明白である。デカルト的延長は、神の創造物であり、自らは動くことの出来ないものであり、それゆえに、その展開のために「運動」が必要である。しかるにスピノザが解するところの「延長」は、「神」の永遠無限の本質を表現する一属性として自己展開するものである。ゲルーも言うように、「延長」は、動く力の無いかたまりではなくて、自らを措定し、自ら無限に多くの様態を産出する無限なる実体（あるいは属性）である、要するに、無限なる能力である。(15)

以上見てきたチルンハウスとスピノザとの往復書簡の検討から、次のことが明らかになるであろう。

スピノザは、延長の属性における直接無限様態として「運動および静止」を挙げている。それにもかかわらず、チルンハウスの度重なる問い、すなわち、どのようにして延長の概念から事物の多様性がアプリオリに証明され得るかという問い、しかもその際、運動なしにこのことは不可能であろうというチルンハウスの示唆にもかかわらず、この問いに対してスピノザは、自らの解する「延長」の概念をあてるだけで、「運動および静止」という自ら先に示した延長の属性における直接無限様態には一言も触れていない。

ゲルーも言うように、スピノザにおいては、「運動」は「延長」を分割することが出来ない。そもそも「延長」は分割することの出来ないものである。様態の多様性は、「運動」から生じるのではなくて、「神」の能力から生じるのである。(16)

以上からわかるように、スピノザによって延長の属性における直接無限様態とされた「運動および静止」は、既に様態化された持続存在における諸様態に係わるもの、すなわち、自然学的役割を果たすものとしてのみ理解されているのであって、延長の属性から様態の多様性が結果する際に何らかの機能を果たすとかいうような

形而上学的役割を果たすものとしては理解されていないのである。また、そうした形而上学的役割を果たすことを要請されてもいないのである。

## 五

本節では、なぜ「運動および静止」が延長の属性における直接無限様態と考えられるに到ったかを理解しようとする。

ポロックによれば、スピノザは属性の内容全体を無限様態とみなす。だがスピノザは、知覚し得る世界「全宇宙の姿」は単なる物体ではなくて運動により様々に変形される物体であるので、運動を量の定まった実在物と考え、そこで、運動そのものを、物体よりも一層直接的に神から産出され、一層延長の属性の本性に依存する無限様態とみなさざるを得なかったのであるという。(17)

ポロックの説明は、まだ我々の問題の解決にとって十分ではない。

## 六

本節では、延長の属性における直接無限様態を問題視するゲルーの見解を紹介する。

ゲルーもまた我々と同様、「運動および静止」が延長の属性における直接無限様態と考えられたことを問題視している。(18) ただゲルーは、我々とは異なる観点に基づいて論を進めている。すなわち、思惟の属性における直接無限様態と延長の属性における直接無限様態との相関性という観点に基づいて、「運動および静止」が延長の属性における直接無限様態とみなされることには問題があると論じている。そしてさらに論を進めてゲ

ルーは、体系の整合性を重視する立場から、「運動および静止」に替わる延長の属性における直接無限様態を新たに設定さえしている。

ゲルーによれば、思惟の属性における直接無限様態は「無限な知性およびそれの永遠な諸観念」である。[19] ところが、延長の属性における直接無限様態を「運動および静止」とみなすと、それは思惟の属性における直接無限様態と対応しなくなる。思惟の属性における様態と延長の属性における様態とは、スピノザの体系においては、相関関係にあるから、延長の属性における直接無限様態の内容を構成するものとしては、思惟の属性における直接無限様態の内容を構成する精神（あるいは観念）の永遠な本質の世界と相関関係にあるものとして、物体の永遠な本質の世界が考えられなければならない。[20] この対称性は、スピノザが、思惟の属性における永遠な本質である精神は、物体の永遠な本質を延長の属性において対象として持つと考えているがゆえに、是非とも必要であるという。[21]

要するにゲルーは、延長の属性における直接無限様態としては、「運動および静止」ではなくて、「物体の永遠な本質の世界」があてられるべきであるというのである。そして、『エチカ』、第五部、定理四〇備考、「我々の精神は物を知性的に認識する限り思惟の永遠な様態であり、これは思惟の他の永遠な様態によって決定され、後者はさらに他のものによって決定され、こうして無限に進み、このようにしてこれらすべての様態は合して神の永遠、無限な知性を構成する。」からして、無限の知性と対称をなすものが物体の永遠な本質の世界でなければならないという。[22]

一方、スピノザによって延長の属性における直接無限様態と考えられた「運動および静止」については、ゲルーはこれを延長の属性における間接無限様態に移行させている。ゲルーによれば、物体の本質の内的力を表

現するものがコナトゥスなのだが、このコナトゥスの相互運動に原理を持つのが物体の変化と運動である。そして各々の物体を構成する「運動および静止」の割合は、物体の永遠な本質の内的特色を、存在において表現するものに他ならないという。そこで、「運動および静止」は「全宇宙の姿」の中にあるのであって、それは延長の属性における間接無限様態でしかあり得ないという。(23)

体系の整合性を重視する立場から見るならば当然、思惟の属性における直接無限様態と延長の属性における直接無限様態とは相関的でなければならないはずなのに、どうして実情はそうなっていないのかというその理由を明らかにしてゲルーは次のように述べている。(24) すなわち、思惟の属性における直接無限様態と延長の属性における直接無限様態とは起源を異にするのであるという。前者はその起源を伝統的な形而上学に持ち、永遠な本質と束の間の存在との原因である神的実体の概念に根拠を置いている。一方、後者はその起原をデカルトに由来する当時の自然学に持ち、実体的延長の概念とそのような実体から様態の多様性が生じる原理としての運動の概念に根拠を置いている。そしてこの自然学においては、現実に存在する物体の世界の他に、永遠な本質の世界は存在しないのであるという。このようにこれら二つの概念は異質なのであるから、それらが相関的でないからといって驚くにはあたらないのである。以上のようにゲルーは説明している。(25)

以上我々は、スピノザによって示された延長の属性における直接無限様態としての「運動および静止」が持つ問題を考察してきた。そもそも無限様態なるものは、無限に多くの様態の統一体である。そして直接無限様態、間接無限様態はそれぞれ本質、存在の世界に係わるものと解される。そこで、直接無限様態においては優れて形而上学的役割を果たすものと考えられる。しかるに、『エチカ』において明らかなように、「運動および

静止」は自然学的役割しか果たしていない。さらに延長の属性における事物の多様化の原理は、延長の属性そのものにあるのであって、「運動および静止」はそこにおいて何ら役割を果たしていない。以上よりして、「運動および静止」は形而上学的役割を果たすべき直接無限様態とは考えられず、間接無限様態に関係づけられるものと考えられなければならないというのが我々の論じるところであった。

また小論では、我々とは異なる立場からではあるが、同様に、「運動および静止」が延長の属性における直接無限様態とみなされたことを問題視するゲルーの見解を紹介した。ゲルーの場合は、思惟の属性における直接無限様態と延長の属性における直接無限様態とは相関関係になければならないはずであるという体系の整合性を鑑みての議論であった。そしてゲルーの場合も、「運動および静止」は、延長の属性における間接無限様態と考えられているのであった。

無限様態は従来よりスピノザ哲学における問題点の一つであったようである。それに関する研究も様々な観点からなし得るであろうと思われる。我々は小論において、延長の属性における直接無限様態を取り上げその役割を考察することにより、スピノザ哲学体系上のその位置に関して検討を加えることを試みた。この試みが、スピノザ哲学体系の構造について、その問題の所在を明らかにしその見通しを立てる上で参考となれば幸いである。

## 註

スピノザのテキストは、*Spinoza Opera*, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, herausgegeben von Carl Gebhardt, Heidelberg, Carl Winters, 1925 を使用した。
邦訳は、畠中尚志氏のもの（岩波文庫）を参考とさせて頂いた。

(1) M.Gueroult,*Spinoza*,Georg Olms,1968,vol. I ,p.309
(2) B.Spinoza,*Ethica*, I , Propositio 28 Scholium
(3) B.Spinoza,*Korte Verhandeling van God,de Mensch,en deszelfs Welstand*, I ,Cap. II Tweede zamenspreekinge
(4) M.Gueroult,*Ibid.*,vol. I ,p.313
(5) *Ibid.*,vol. I ,p.312-313
(6) *Ibid.*,vol. I ,p.309
(7) *Ibid.*,vol. I ,p.318
(8) *Ibid.*,vol. II ,p.161
(9) F・ポロックはチルンハウスについて概略次のように述べている。

チルンハウス（一六五一～一七〇八）はボヘミアの貴族で、ライデン大学に学び、晩年には数学と自然学において高度な卓越性に到達した。著書 Medicina Mentis はスピノザの『知性改善論』に頼るところ大である。デカルトを熱心に研究し、スピノザとはいくつかの形而上学的問題について書簡を交わした。その質問はスピノザが受け取った書簡の中で最も留意に値するものであった。それらは常に知的であり、その一、二のものは大変説得力に富み、現代の批判者も手の加えようがないほどである。一般の読者でもスピノザがそれらの質問に直面してかなり困難を見出しているという事実のうちにそれらの質問の持つ傾向の確かなしるしを知るだろう。彼は自然学上の発見がアプリオリな方法によって進められるかも知れないという誇張された意見を歓迎した。

(10) F.Pollock,*Spinoza,His Life and Philosophy*,C.Kegan Paul & Co., 1880,p.73 参照
F.Pollock,*Idid.*, p.171

(11) スピノザにおいて「思惟」および「延長」は神の永遠無限の本質を表現する属性であって、神から産出されるものではない。

(12) M.Gueroult,*Ibid.*,vol. II,p.179

(13) H.H.Joachim,*A Study of the Ethics of Spinoza*,Oxford at the Clarendon Press,1901,p.44

(14) B.Spinoza,*Ethica*, I ,Definitio 1 ,Propositio 29 Scholium & II ,Propositio 3 Scholium

(15) M.Gueroult,*Ibid.*,vol. II ,p.151

(16) *Ibid.*,vol. I ,p.324

(17) F.Pollock,*Ibid.*,p.165

(18) M.Gueroult,*Ibid.*,vol. I ,p.321

(19) 思惟の属性における無限様態について、ゲルーは次にように説明している。『エチカ』、第二部、定理三に、「神の中には、神の本質についての観念、および、神の本質から必然的に生じるあらゆるものについての観念が必然的に存在する。」と述べられているが、ここに言われる「神の本質についての観念」および「神の本質から必然的に生じるあらゆるものについての観念」が思惟の属性における無限様態を成り立たせる。後者すなわち「神の本質から必然的に生じるあらゆるものについての観念」(所産的自然についての観念)は、この無限様態の内容を構成するものであり、前者すなわち「神の本質についての観念」(能産的自然についての観念)は、その内容を統一的な全体たらしめるものである。そして定理四に、「無限に多くのものが無限に多くの仕方で生じてくる神の観念はただ唯一でしかありえない。」とあるように、この両者は分離されることなく唯一であって無限様態を成り立たせているのである。そして、この無限様態は、個物ないし様態の永遠な本質を対象として持つ永遠な観念の無限に多くのものの全体と見られるとき、それは直接無限様態と考えられるのであり、また、持続において次々に生じる観念の無限に多くのものの全体と見られるとき、それは間接無限様態と考えられるのである。こうしてゲルーは、思惟の属性における直接無限様態を「無限な知性およびそれの永遠な諸観念l'entendement infini et ses idées éternelles」と解し、間接無限様態を「自らの存在のうちに存在し続けようと努力し、持続の中で互いに影響し合い、その諸部分は絶え間なく変化するにもかかわらず、全体は変わらずにいるところの、現実に存在する諸観念ないし諸精神の総体le tout des idées ou âmes existantes,s'efforgant d'exister et de persévérer dans leur existence, agissant les unes sur les autres dans la durée, tout qui demeure immuable malgré le changement incessant de ses parties」と解する、

要するに、「無限に多くの有限な意志を含む無限な意志 la volonté infinie comprenant l'infinité des volontés finies」と解する。

(20) M.Gueroult,*Ibid.*,vol. I ,p.318参照

(21) M.Gueroult,*Ibid.*,vol. I ,p. 322

*Ibid.* なお、ここではゲルーは、『エチカ』、第五部、定理二二、「神の中には、このまたはかの人間身体の本質を永遠の相のもとに表現する観念が必然的に存在する。」を指して論じているのである。

(22) *Ibid.*,vol. I ,p.324

(23) *Ibid.*

(24) *Ibid.*,vol. I ,p.323

(25) ゲルー以前の解釈者の中に、ゲルーと同様の延長の属性における直接無限様態を設定し、しかもそれを「運動および静止」と和解させようとした〇・ベンシュがいる。ベンシュは、個物ないし様態の本質は神とその属性から必然的に生じ、それらによってそれらの中に含まれて存在するものとして他のすべての本質と共に定立され、そこにおいて神の永遠性にあずかるとした。そしてこのように神によって永遠とされつつ神の中に含まれているすべての本質の統一性、総体性そして秩序性が延長の属性における直接無限様態としての「運動および静止」であるとした。

O.Baensch,*Ewigkeit und Dauer bei Spinoza* (in Kantstudien,1927 XXXII),P.73参照